

第2回 醒ヶ井通を歩く

水の都・京都

京都がいかに広く観光都市として浸透しているかは、JRのキャッチコピー「そつだ京都へ行こう」が、なんの説明もなく単独で成り立つことから如実にわかります。ために「京都」をわたしが現在すんでいるところにかえて、「そつだ足柄へ行こう」などとしてもすんなり受け入れられないことからあきらかです。

観光都市京都の重要な要素が、千年余りの歴史であることはまちがいありませんが、わすれてはならない要素が「水」です。上流にダムのない、したがって水量の豊富な鴨川、桂川が市の東西を流れており、山紫水明の景観をつくっています。さらには、地上からはみえないけれども、豊富な地下水があります。『改訂京都民俗志』（井上頼寿、ワイド版東洋文庫二一九、平凡社、一九六八）の「井」の項には、京都の名水として、驚くなかれ、一九〇件以上も記載されています。「井」という項目を立てることで、京都に井戸や湧き水が多いことのあらわれでしょう。

これらの井戸や湧き水は、『アジア古都物語 京都千年の水脈』（井上勝弘、楠見晴重、山田邦和、NHK出版協会、二〇〇二）によって「京都水盆」と名づけられた地下の天然ダムによるもので、京都の地下には琵琶湖に匹敵する量の地下水が貯蔵されてい



仁丹町名看板の所在（醒ヶ井通の四条から松原まで）

るといわれています。この豊富な地下水は、琵琶湖疏水による上水道の整備によって、かつて飲料水として生活基盤を支えてきた役割を終えています。今なお、京友禅、京湯葉、京菓子、酒醸造などの伝統産業を支えています。

なかでも、京都三名水として喧伝されているのは、染井（京都御苑の東、なしのまじしんじや梨木神社内、三名水のうち、もとの井戸が残っている唯一のもの）、醒ヶ井（もとほ、さめが醒ヶ井六条、同じ水脈で掘り直したものが、醒ヶ井四条にある）、泉井（あがたい京都御苑管理事務所そば、長く枯れていたが、一九九七年に復活）。今回は、醒ヶ井通を歩いて、醒ヶ井（佐女牛井）の今昔を訪ねてみましょう。

名水と和菓子、そして仁丹町名看板

今回の京めぐりの出発点は、四条醒ヶ井。醒ヶ井通は、堀川通の東一ツ隣、南北の通りです。この十字路の東北の角、老舗の和菓子屋亀屋良長の西壁に、仁丹町名看板「下京区・醒ヶ井通四条上ル藤西町」①が額入りで掲げられています。並んで右に、別の町名看板「中京区・醒ヶ井通四条上ル藤西町」も掲げられていますが、「下京区」が「中京区」に変わっているのがおもしろい。看板の劣化から判断して、「下京区」の看板が新しくして、「中京区」の看板が古いと勘違いしてしまうが、さにあらず。一九二九年（昭和四年）に、上京区から左京区を分區。同時に、上京区と下京区の隣接部分を按分し、中京区と東山区を分區しています。したがって、「下京区」の仁丹町名看板は、一九二九年（昭和四年）以前に設置されたものですが、保存状態の良さは格別です。この看板に限らず、かなりの数が新品とみまがうくらいに保存されており、手を抜かずに珫瑯を引いて、しっかりと焼き付けている職人の腕がしのべれます。

額装の町名看板の左奥に、醒ヶ井の井筒がしつらえてあり、飲めるようになっていました。昭和三七年の阪急地下鉄工事で洩れた井戸を、平成三年に掘り直して、「醒ヶ井水」と名づけて菓子作りに用いていると聞きました。藤原俊成が玉津島神社を勧請した際に、新玉津島神社と称したひそみに倣い（第5回で取り上げます。お楽しみに）、ここでは、新醒ヶ井と申しておきましょう。亀屋良長の創業（一八〇三年、享和三年）以来の名物は、烏羽玉。黒砂糖と漉し餡をねり固め、寒天でくるんで芥子粒を振りかけた



醒ヶ井通四条上ル藤西町①



醒ヶ井水—新醒ヶ井

もの。

地下水と伝統産業、そして仁丹町名看板

京都の町名は、両側町となっていますが、その性格上、二つの町の境界のとり方には、いろいろな変り種があります。四条通の

瑠瑠製の仁丹町看板（とくに京都に設置されたもの）がどこで製造され、いつ設置されたかについては、よくわかりません。「下京区」「上京区」の表示から、一九二九年（昭和四年）以前に設置されたことは確かです。

京都博覧会がほぼ、毎年開かれており、その道案内として設置された可能性があります。なかでも、一九一五年（大正四年）（大正天皇即位大礼を記念した大典記念京都博覧会）、一九二四年（大正十三年）（昭和天皇（当時は皇太子）の成婚奉祝万国記念博覧会参加五十周年記念博覧会）、一九二八年（昭和三年）（昭和天皇即位大礼を記念した大礼記念京都博覧会）の博覧会が大きな催しですので、これらが契機になっているかと推測されます。

ついでに、本文で述べたほか、京都十一区の残りの誕生については、一九三一年（昭和六年）に右京区と伏見区誕生。一九五五年（昭和三十年）に上京区から北区、下京区から南区を分區。一九七六年（昭和五一年）に右京区から西京区が分區、さらにに東山区から山科区が分區となつていきます。

また、伏見区の町名看板には、「伏見市」となっているものがあります。伏見市の誕生は一九二九年で、京都市に伏見区として併合されたのは一九三一年ですから、これらの看板の設置時期については、一九二九年～一九三一年の間であると特定できます。

一つ南の東西の通りは、綾小路通あやのこうじ通りですが、醒ヶ井綾小路の十字路から東へいったところ、東西に隣り合った家に、町名の異なる仁丹看板を見つけました。



あやのこうじ通り 醒ヶ井東入 西綾小路西半町 ②



あやのこうじ通り 油小路西入 西綾小路東半町 ③

二つの看板「綾小路通醒ヶ井東入西綾小路西半町」②と「綾小路通油小路西入西綾小路東半町」③とを比べると、基点の十字路の取り方が違うこと（したがって東入ルと西入ルになる）と、町名が違うことに気づきます。「西半町」、「東半町」という町名の付け方から、もともと、西綾小路町が二つに分かれたものであることは容易に想像が付きまます。ただし、今は、もとに戻って、一つの町内として扱っているようです。

このあたりは、元の格致小学校（今は、建物を利用し、一部は「ユーススクエア高辻」として、青少年活動のセンターとなっています）の学区で、中世から染物の盛んなところ。堀川や西洞院

川に挟まれ（両方とも、今は、暗渠になっていて往時をしのぶことができないのは残念です）、醒ヶ井通の名で示されるように伏流水が豊富なため、つい半世紀前までは、友禅染屋などが軒を連ねていたといえます。蒸し工場、しみ抜き、手書き友禅、型友禅、悉皆屋しつがいやなどの工房が、次第に郊外（西京区、山科区など）へ流出し、そのあとは集合住宅（いわゆるマンション）が立ち並び、ご時勢になっていきます。とはいっても、まだまだ、職人の町は健在なようです。ちなみに、先ほどの仁丹町名看板②のお宅には、「模様引黒染」の看板が懸かっておりました。

黒染くろぞめとはなんぞや。この詮索は、室町將軍家の兵法指南としてしられた吉岡一門にたどりつきます。宮本武蔵と決闘したという吉岡清十郎もその一人（これは、あくまでも伝承の類です）。当主は、代々、吉岡憲法を名乗ったといえます。江戸時代になって、剣法をすて、四条西洞院で染物業を専門とするようになりました。開発した黒染は、「吉岡染」あるいは「憲法染」として有名になりました。今日でいうブランドです。濃く煎じた楊梅を使い、鉄漿かねによる鉄媒染を何度も繰り返し、茶がかつた黒を発色する技法で、その色は、憲法黒けんぽうくろとしてはやされたといわれています。日本の伝統色に興味のある方は、『日本の色辞典』（吉岡幸雄、紫紅社、二〇〇〇）をご覧ください。

住吉神社

醒ヶ井通を南へ、元格致小学校をすぎて、醒ヶ井高辻までくると、その十字路の東南かどに、住吉神社（醒ヶ井通高辻下ル住吉

町）があります。醒ヶ井通を挟んで、その向かい側、民家の車庫のそばに、仁丹町名看板「醒ヶ井通高辻下ル住吉町」④があります。この町名「住吉町」は、住吉神社にちなんだもの。



醒ヶ井通高辻下ル住吉町 ④

住吉神社は、藤原俊成（一一一四～一二〇四）「しゅんぜい」とも読む。平安末期から鎌倉初期の歌人。千載和歌集の選者の勸請かんとしやうした三つの神社（和歌三神）の一つとされています。和歌の神様であることから、摂津の住吉明神を分祀したもの。住吉神社由来には、「もともとは、五条室町にあつたが、応仁の乱の兵火にかかつて、社殿を焼失。一五六八年（永禄十一年）に正親町天皇の勅により現在の地の遷座した」と書かれています。『都名所図会』巻之二には、「新住吉社」と記載されています。現在の社殿は、一八九九年（明治三十二年）の建立。この神社の外観でもしるいのは、神社の塀につけてある球形の街灯。掲載した写真にも二個写っていますが、醒ヶ井通と高辻通に面した板塀に取り付けてあります。街灯の一つ一つに、寄付者の名前が記してあり、市街地の神社としては、秀逸なやり方です。通常の神社では、石の柵さくになっていて、そこに寄付者の名前が記してあることが多いのですが。

藤原俊成が編んだ『千載和歌集』巻第二十・神祇歌には、住吉



住吉神社（奥に人丸神社の祠が見える）

の社の歌合に詠んだ歌として、四首採択されております。その中には、俊成自身の歌として、次の歌が載っています。

同じ歌合に

皇太后宮大夫俊成

いたづらにふりぬる身をも住吉の

松はさりともあはれしるらむ

千載和歌集巻第二十・神祇歌・一二六三

この歌合は、一一七〇年（嘉応二年）に住吉の社頭においておこなわれたものと考えられますので、この頃には、住吉明神が和歌の神として確立していたことがわかります。

住吉明神が和歌の神様として、広く歌人の崇拜をあつめていたことは、少し時代は下がりますが、能の「雨月」などに示されています。西行法師が住吉大社に参詣したときに、老夫婦の住む家に一夜の宿を求めると、シテの老人は「村時雨の音を聞くために軒を聳く」、その姥は「月を見るために軒を聳かず」と、二人が雨音と月光をめぐる風雅な争いをしている最中。老人が詠んだ下の句「賤が軒端を聳きぞわずらふ」に、西行が上の句「月は洩れ雨はたまれとにかくに」をつけると、老夫婦はよるこんで招きいれる。夜が更けて、住吉明神が禰宜に乗り憑り、風雅をめてて舞つ、というあらすじです。

藤原俊成と和歌三神

住吉神社の境内には、人丸神社が祀られています。これも俊成の勧請した和歌三神の一つとされています。『拾遺都名所図会』



人丸神社

卷之二には、「人麿御霊社」として、この神社が祀られた経緯が載っています。それによれば、「明和六年（一七六九年）に、冷泉為村（一七二一―一七七四）が、和歌三神のうち、新玉津島神社と新住吉神社があるのに、人麿神社がないのは惜しい」とこの近辺をさがした。町内で御霊祠と呼ばれていた祠が、ちょうど故地にあたるのを見つけ尊敬しはじめた。このことを町中が知り、社殿を修造し、祭事を改めて三月十八日にした」と記載されています。なお、冷泉為村は、藤原俊成・定家の子孫。冷泉家は、和歌の宗家として、平成の現在も続いています。

この顛末から判断するかぎり、俊成が勧請したと伝えられる三つの神社も、全部を俊成自身が勧請したとはかぎらない。もともと

と、藤原俊成の時代に「和歌三神」として、現在の形で確定していたかどうかも確証はなく、あくまでも伝承とすべきでしょう。

新和歌三神

紀貫之が、古今和歌集仮名序で、うたのひじり「歌仙」としてあげているのはただ一人、柿本人麻呂。古今和歌集の本文だけでなく、仮名序でも、柿本人麻呂の歌

ほのぼのと明石の浦のあさ霧に

島がくれゆく舟をしぞ思ふ

を引用しています。仮名序の別のところで、日本書紀に載っている衣通姫（和歌の浦にある玉津島神社の祭神）の歌

わが背子がくべき宵なりささがにの

くものふるまひかねてしるしも

が引用されています。したがって、人丸神社と玉津島神社が、後世、和歌三神として崇められるようになったのは、異存のないところですが。しかし、住吉明神が和歌三神の一柱となった経過はこれではよくわからない。

容易に思いつくことは、住之江の浦が、明石の浦や和歌の浦とならんで、歌枕として有名だったことが関係しているのかもしれないということですが。それにしても、人丸神社（柿本人麻呂）と玉津島明神（衣通姫）が歌人を神格化したものであるのに対して、住吉明神はもともとが抽象的な航海の神です。理屈をこねても仕様がなないといえばそのとおりですが、和歌三神は、カテゴ

リーが違つことを同列に扱つているとなり、理科系のわたしからみるとどうもすわりがわるい。

そこでわたしの提案（改竄）。古今和歌集の仮名序では、柿本人麻呂と甲乙つけがたい歌人として、山部赤人をあげ、さらに万葉集にある歌

和歌の浦に潮満ちくれば渦を無み

あしべをさして鶴鳴きわたる

を引用しています。この歌は、山部赤人が、聖武天皇の和歌の浦への御幸に随行したときのもの。わたしの提案は、和歌の浦にもう一つ、赤人神社を創建したうえで、和歌三神として、人丸明神（柿本人麻呂）と玉津島明神（衣通姫）のほかに、赤人明神（山部赤人）を加えるというものです。典拠は、古今和歌集の仮名序とくれば、この改竄も完璧なはずです。もともと、山部赤人を和歌三神の一人に数えることはすでに例のあることです。新しいところは、和歌の浦に赤人神社を創建するということだけです。

とはいえ、私的な改竄は、もはや遅きに失しており、しかも和歌の浦が二重に勘定されることになり不都合。そこで、別の観点から、住吉明神が航海の神から、和歌の神へ変身したことを詮索してみましよう。『古今和歌集』巻第十七・雑歌上・九〇五に詠み人知らずとして収録されている歌が、脚色されて『伊勢物語』の一七段となっています。

むかし、みかど、住吉に行幸したまひけり。

われ見てもひさしくなりぬ住の江の

岸のひめ松いくよへぬらん

おほん神、現形し給ひて、

むつましと君は白波瑞垣の

久しき世よりはひそめてき

あとの歌は、『新古今和歌集』巻第十九・神祇歌・一八五七に、「伊勢物語に、住吉に行幸のとき、おほん神げんぎやうしたまひてとせるせり」と注記して収録されています。

この伝承を組織的に利用して、平安時代の終わりに、住吉明神を和歌の神に仕立てたのは、住吉大社第三九代神主津守国基（一〇三〇〜一〇二〇）であると推定されています。かれは、歌人として後拾遺和歌集などに選ばれているほか、神社経営に辣腕を振るつたと伝えられています。これは孫引きですが、川井純郎は、「和歌神としての住吉社」（『神道史研究』18-4、神道史学会、昭和四五年）で、「津守国基が和歌浦の玉津島明神祭神（衣通姫）を住吉大社の第四社へ勧請したこと」を指摘しています。また、祭壇に使う葛石を探しに玉津島神社にたづねたとき、夢の中に女房ができて、採るべき石をおしえられたと伝えてきます。このあたりはなしも、結構よくできていますので、すこしずつ、和歌の神としての住吉明神の伝承が形成されていったのでしょう。

落語の和歌三神

興味のない人には、退屈な詮索がつづきましたので、話題を、落語に転じましよう。古今亭志ん生の落語に、「和歌三神」という

のがありますが、「こ時勢にあわないところを修正してご紹介いたします。」

風流人のご隠居に雪見酒を振る舞われたお菰こもさんの名前が、犬の糞くその掃除して近在の百姓に売っている安兵衛、通称秀こと「糞屋の安秀」、寒さにちぢこまって垣根の下で丸くなっている人で「垣の本の人丸」、すきつ腹をかこつ境遇になりさがった平吉こと「すきはらのなり平」。振る舞い酒のお礼に詠んだ歌がおもしろい。

糞屋の安秀

吹くからに秋のくさめをとめかねて

むべ鼻かぜを風邪ふうじゃといふらん

垣の本の人丸

ほのぼのとあかしかねたる冬の夜に

震えこらえて舟さえこげず

すきはらのなり平

千早ふる神や仏に見離され

から飯櫃めしびで水すするとは

上の句のまじめな調子にくらべて、下の句のふざけがきいていきます。それにしても外見は重要で、戯れ歌も形を整えて載せると、もっともらしく見えるものですな。そして、下げは、風流人のご隠居「おまえさんがたは、雲上人。雲の上の和歌三神ですな。」「乞食達「いえ、菰こもの上の馬鹿三人でございます。」

和歌の流派によつては、和歌三神をいろいろに選んでいます。が、この落語では、文屋康秀、柿本人麻呂、在原業平の三人に当てています。ちなみに、戯れ歌の本歌は、古今和歌集の載つてお

ります。

是貞のみこの家の歌合のうた

文屋康秀

吹くからに秋の草木のしほるれば

むべ山かぜをあらしといふらん

古今和歌集巻第五・秋歌下・二四九

ほのぼのと明石の浦のあさ霧に

鳥がくれゆく舟をしぞ思ふ

この歌は、ある人はいくかきのもとの人丸が也

古今和歌集巻第九・羈旅歌・四〇九

在原業平

ちはやぶる神代もきかず立田川

から紅に水くくるとは

古今和歌集巻第五・秋歌下・二九四

文屋康秀と在原業平の歌は、百人一首にも採られていますので、「ご存じのとおりです。ちなみに、紀貫之きのつらゆきによる古今和歌集仮名序なまじりでは、「ちかき世にその名をきこえたる人」として、僧正遍正、在原業平、文屋康秀、喜撰法師、小野小町、大伴黒主の六名が、どちらかといえば辛口の批評とともにあげられており、のちに「六歌仙」と呼ばれるようになりました。この中の二人だけを特別に取り出して、和歌三神のうち二柱とするのには無理があります。そこは落語。落語作者の立場にたつて推測しますと、百人一首でよく知られていて、男で抹香臭くない歌人を、和歌三神にでつちあげて、はなしを通じやすくしたものでしょう。

落語「鼓ヶ滝」と和歌三神

上方落語にも、和歌三神を題材にしたものとして、「鼓ヶ滝」があります。これは、かなりの瀟灑うんちやくもの。西行法師が、鼓ヶ滝を訪ねて、

伝え聞く鼓ヶ滝に来てみれば

沢辺に咲きたんぼの花

という和歌を詠み、われながら、よい歌ができたという悦えつろにいます。蒲公英たんぽぽは、別名鼓草つづみくさ。「たんぼの花」を、鼓ヶ滝つづみがたきに掛けて、ことさらに詠み込むなどは、落語らしい凝った趣向。老夫婦の家に一夜の宿を借り、自慢げにこの歌を披露したところ、宿の爺、婆、孫娘のそれぞれに指摘されて、散々に直された挙句、結局、

音に聞く鼓ヶ滝にうちみれば

川辺に咲ける姫射干の花

という歌に変わります。三者三様の指摘が、もつともらしくて、感心いたします（試みに、三人がどう指摘したか、考えてご覧下さい）。西行法師、内心はおもしろくないが、もとの自分の歌よりもよくなっているのは確かなので、しぶしぶ三人の指摘を受け入れることにいたします。実は、これが夢。連れの僧に起こされると、そこは鼓ヶ滝の前。「その三人は、人丸明神、住吉明神、玉津島明神の和歌三神の化身であった」とあとで気づくというおはなし。上方落語ですから、和歌三神に、住吉明神は必須。下げは、西行「拙僧の反省が足りないといって、和歌三神の罰が当たるのではなからうか」、連れの僧「いや、この滝の名は鼓、最初

から、撥ぼはない」。この下げのかわりに、和歌三神のうちの住吉明神の霊が現れて、西行法師の和歌への精進しんじんを寿いで舞うということにすれば、「鼓ヶ滝」は能としても十分通用します。落語といえども、教養が溢れた話に仕立てられております。落語では、「たんぼの花」をそのまま残す案や、「白百合の花」とする案などが話されておりますが、ここでは、わたくしめの改竄の結果新たに加わった「赤人明神」が、さらに手をくわえて、「姫しゃがの花」という具合に変わっております。

「鼓草」は、たんぼの花を二つ、茎でつなげると鼓の形になるので、そう呼ばれることは肯けますね。この植物が、なぜ「たんぼ」と呼ばれるようになったのか。この語源には、諸説あります。鼓の音を幼児語で「たんたんぼんぼん」とまねたことからきているという説があります。さらには、小鼓の奏法（高橋喜一校注『新撰狂歌集』の注3）には、強く打つ「た」あるいは「たん」と擬音表記する打ち方、軽く皮の周辺を小刻みに打つ「ち」と表記する打ち方、調べ緒を締めて打ちすぐに緩める「と」「ぼ」と表記する打ち方があるとされていますので、ここから「たんぼ」ということになったという説もあります。この注が付されている狂歌（『新撰狂歌集巻上』、寛永年間（一六二九～一六四四）刊行）が、落語「鼓ヶ滝」のもとになっています。

撰津国鼓の滝にてよめる

音ねにきく鼓の滝をうちみれば

沢辺さへにちちたんぼの花

『新撰狂歌集巻上』・春・三

岩崎佳枝、網野喜彦、高橋喜一、塩村耕校注

『七十一番職人歌合・新撰狂歌集・古今夷曲集』
岩波書店、新日本古典文学大系六一（一九九三）

ここまで知れば、『たんぼほの花』を、鼓ヶ滝に掛けて、ことさらに詠み込むなどは、落語らしい凝った趣向。』と書いたのは、早々に撤回しなければなりません。さらには、『姉じゃがの花』という具合に変わっております。』とした改竄ももつてのほかと、いうことになりました。実は、この狂歌は、『拾遺和歌集』に収録された異様な法師の歌の本歌取りです。この歌の詞書では、鼓の滝は肥後の国にあることになりました。

清原元輔肥後守に侍ける時、かのくにの鼓の滝という所を

みにまかりたりけるに、ことやうなる法師のよみ侍ける

をとにきくつゞみの滝をうちみれば

たゞ山川のなるにぞ有ける

拾遺和歌集巻第九・雑下・五五六

上記狂歌の本歌取りの眼目は、「鼓の滝」から「鼓草」(つまり、たんぼほ)を連想し、「沢辺」の「辺」で小鼓の皮の周辺をほのめかし、「ちゝ」で皮の周辺を打つ奏法を読み込んだところにあります。「ちゝ」は少しだけの意味を掛けています。

狂歌には、たんぼほと鼓の連想で読まれたものがいくつもあります。次の狂歌は『古今夷曲集』(寛文五年(一六六五)刊行)に載っているものです。「ちゝつと」は「少しだけ」と小鼓の奏法「ち」を掛けたもの。この掛詞に呼応して、「はやし」は「林」と「囃子」を掛けています。

春草

行順

たむぼゝのはなのちゝつと咲比さくらひの

野山はやしはおもしろひな

『古今夷曲集』巻第一・春歌・四八

岩崎佳枝、網野喜彦、高橋喜一、塩村耕校注、

『七十一番職人歌合・新撰狂歌集・古今夷曲集』

岩波書店、新日本古典文学大系六一（一九九三）

ところで、「たんぼほ」の呼称と「鼓草」の呼称とは、どちらが先なのでしょう。狂歌に、たんぼほと鼓の連想で読まれたものがあることから考えて、「たんぼほ」の呼称のほうが先のような気がします。「たんぼほ」の呼称が先にあつて、鼓の奏法との連想が新鮮だったので、狂歌などに詠まれるようになり、のちに「鼓草」と呼ばれるようになったとの推測です。さらには種子の綿帽子の形状から推測するに、「たんぼほ」は「田の穂」から転じたものではないか。「の」が「ん」に転じるのはよくあること。しかし、「穂」が口調から「ぼほ」に変わったというは、ちよつと苦しいところがありますね。これは私の単なる当て推量なので、文献できちつと調べる必要があります。もつとも、「鼓草」の呼称が先にあつたとしても、それなりの論理が考えられますので、この当て推量は話半分以下に聞いて下さいませよ。それにしても、万葉集や平安時代の文献に「たんぼほ」が出てこないのはなぜでしょうか。これも、いくつかの可能性が考えられますが、これまでの「たんぼほ」の語源の諸説にも、満足できる答えはありません。



仁丹町名看板の所在（醒ヶ井通・堀川通の松原から六条まで）

三善清行の屋敷跡

さらに南にゆき、醒ヶ井松原の十字路をこえると、醒泉せいせん小学校に出ます。校名の「醒泉」は、「醒ヶ井」を漢語に置き換えたもの。醒泉小学校の構内の醒ヶ井通に面したところに、「三善清行邸跡」の石碑があります。

『今昔物語集』二十七卷第三十一に、清行が五条堀川の化け物屋敷に引越すはなしがでてきますが、その屋敷跡が今は小学校。このはなしは、清行が妖怪を理詰め、退散するように説得するところが妙におもしろい。



三善清行邸跡の碑

『拾遺都名所図会』巻一には、「三善清行家」と紹介されて、今昔物語が引用されています。ただし、振りがなは「きよゆき」でなく「きよつら」となっています。多分、人形浄瑠璃や歌舞伎の『菅原伝授手習鑑』の影響によるのでしょう。また、『和漢朗詠集全注訳』（川口久雄、講談社学術文庫版、一九八二）によれば、「きよやす」と読むこともあるようです。

三善清行（八四七〜九一八）は、平安中期の漢学者。善相公ぜんしやうこうともいい、菊の花をめでた漢詩一首が、『和漢朗詠集』に採られています。延喜格式の制定に携わるなどの功績がありますが、出世は遅かったらしい。菅原道真すがわらのみちまね（八四五〜九〇三）とほぼ同時代の人で、両者の間に確執があったといわれています。菅原道真と藤原時平ふじわらのときひら（八七一〜九〇九）の権力争いに際して、三善清行が道真に身を引くように勧告した書状は、親切か中傷か判断に苦しむような文面で、清行の直情径行ぶりが際立っているようにおもわれます。

三善清行の直情径行といえ、『今昔物語集』二十四卷第二十五の「はなしも、結構あざとい。三善清行が紀長谷雄（八四五〜九一一）と口論して、「無才の博士は古より今に至るまで世にない。ただし、和主（あなた）のときに始まる」と味噌糞にけなしたことが記載されています。実際には、紀長谷雄の漢詩の才は抜群で、二十首あまり『和漢朗詠集』に採られています。この点では、三善清行ははるかに及ばない。ちなみに、紀長谷雄は、菅原道真とともに、八九五年の渤海使を鴻臚館で接待しており、師弟の関係にあります。この説話の根底には、時平側に組した三善清行・藤原菅根との派閥あそびがあったのではないのでしょうか。

このあたりに、仁丹看板はないかとさがすと、醒泉小学校の裏手、油小路通に面した門の向かいに、町名看板「油小路通松原下ル樋口町」⑤がありました。



油小路通 松原下ル樋口町 ⑤

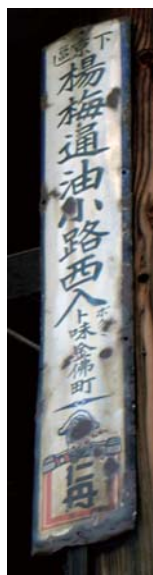
金仏？ ト味？

醒泉小学校の南塀に沿って万寿寺通を東に向かいますと、「万寿寺通油小路東入上金仏町」⑥なる町名看板がみつかりました。

「上金仏町」というのもおもしろい名前です。さらに南には、「ト味金仏町」という一見では読めない地名をふくんだ看板、「楊梅通油小路西入ト味金仏町」⑦もあります。難読を意識して、「ト味」の箇所のみ、「ボクミ」とルビが振られているのがおもしろい。



萬壽寺通 油小路 東入 上金佛町 ⑥



楊梅通 油小路 西入 ト味金佛町 ⑦

「金仏」の由来をたずねると、後白河法皇（一一二七〜一一九二）の「六条殿」（東は西洞院大路、西は油小路、北は楊梅小路、南は六条大路に囲まれた地域にあり、堀川御所ともいう）の仏堂が、のちに延寿寺となり、本尊の金銅仏にちなんで、金仏寺とよばれたことにあります。金仏寺の故地として、この地名が残ったのです。現在延寿寺は、下寺町（河原町六条上ル本塩竈町）に移っていますが、地名の由来になった金仏はほとんど焼失し

てしまいました。別に、六条殿の持仏堂が、延寿寺の西隣に長講堂として現存しています。

ト味のほうは、もう一つ、よくわからない。このあたりに、ト味某が住んでいたという言い伝えもありますが、いまのところ未定におきましょう。

醒ヶ井通の名残

太平洋戦争の末期に、堀川通を防火帯とするため、沿道の家屋の強制疎開が実施され、敗戦後、拡幅した堀川通として、南北の幹線道路として利用されています。今回の京めぐりでは、醒ヶ井通を南下してきたわけですが、五条堀川の交差点をこえたところで、堀川通が少し東にずれて、醒ヶ井通を吸収する形になっています。なぜ、このような不自然な形になったのか、詮索好きのわたくしとしては、断然、気になりました。これは、もとの佐女牛井さめがの位置にも関係しますので、避けては通れませぬ。

明治時代の古地図『京都名所図会』(写真化学株式会社のホームページ http://www.shashin-kagaku.co.jp/kaiya/oldmap/map_k7.htm) および『京都時代MAP 幕末・維新編』(松岡満、光村推古書院、二〇〇三) 参照) をみると、堀川の東西の河岸に道があるのは万寿寺通りまで。万寿寺通から南は、町家が建て込んでいて堀川の東岸には道がなく、西岸は本國寺(移転。現在は、京都東急ホテルが建っています)の境内でやはり道がないように読み取れます。したがって、万寿寺通より南にゆくには、堀川通から折れて、醒ヶ井通をたどるようになっていたようです。

現在、堀川は、西本願寺の前で開渠になっていきますので、その北の延長をたどると、堀川通の西側歩道の下を、暗渠になった堀川が流れていると推定されます。今の堀川通の真ん中が、昔の町家の撤去あと。東側歩道が、旧醒ヶ井通にあたるわけです。実際に、仁丹町名看板にその名残なごりがあります。



楊梅通醒ヶ井東入 泉水町 ⑧



楊梅通醒ヶ井 東入 佐女牛井町 ⑨

五条通の一つ南の東西の通りは、楊梅通ようばいといえます。堀川通の東側歩道からその通りへはいった、すぐ北側に「楊梅通醒ヶ井東入 泉水町」⑧、続いて南側に「楊梅通醒ヶ井東入 佐女牛井町」⑨と、あわせて二つの町名看板があります。難読の「佐女牛井」の部分には、「サメグイ」とルビがふつてあります。ルビに忠実に読むと、佐女牛井町ですが、下京区役所の広報等では、「さめがいちよう」と読んでいるようです。先ほど、紹介した「楊梅通油



六条通醒ヶ井 東入佐女牛井町 ⑩

小路西入ト味金佛町」⑦の看板も、この通りを東に歩いた、すぐのところにあります。

堀川通から東へ入ったところですから、「楊梅通堀川東入ル」であるはずなのに、「楊梅通醒ヶ井東入ル」。堀川通に吸収された醒ヶ井通の名残です。南北の通りの醒ヶ井通の両側町として町名を付けていることに注意すれば、二つの町名看板から、楊梅通を挟んだ南北で、泉水町と佐女牛井町に分かれていることがわかります。ただし、両町とも、西側は、堀川通を通したために、無くなって片側だけになっています。

楊梅通の一つ南の東西の通りは、六条通。六条通を東にはいつて、今度は北側の徳成寺の門前に、「六条通醒ヶ井東入佐女牛井町」⑩の看板があります。ここも、佐女牛井町。片側が無くなった両側町の名残です。

京都は変わらないという先入観がありますが、こと街路に関しては、ずいぶんと名称が変わっています。楊梅通は、平安京の楊梅小路。東西の通りを覚えるためのわらべ歌では、雪踏屋町と呼ばれています。六条通は、平安京の六条大路。わらべ歌では、六条通の北に魚之棚通があるようにも解釈できますが、この解釈

はやや強引です。今の花屋町通は、平安京の佐女牛小路。わらべ歌には読み込まれていません。

佐女牛井跡

旧醒ヶ井通（今は堀川通の東側歩道）に面した、楊梅通と六条通の間が、佐女牛井町。堀川通を挟んだ向かい側、西側歩道の緑地帯に、「佐女牛井之跡」の碑があります。さっきの詮索の結果あきらかになったことは、ここは、暗渠になった堀川の真上です。おそらく、この石碑の東側、今の堀川通の車道部分から東側歩道の間（つまり、佐女牛井町の無くなった西側半分）のどこかが、もとの佐女牛井の位置だと推測されます。石碑の側面には、醒泉小学校創立百周年記念として、昭和四四年建立とありますから、拡張された堀川通を避けるために仕様がなく、ここに建てたのでしよう。かりに中央分離帯に建てると、堀川通（五条堀川の交差点から南は、国道一号線）のこの交通量だと横断することが不可能で、だれも見にくくことができせんからね。

石碑の北側側面には、「源義経堀川御所用水と伝えられ足利時代既に名あり元和二年在銘の井戸杵とも第二次世界大戦に際し昭和二十年疎開の為撤去さる当学醒泉の名は之に由来する」と彫られています。かたわらの駒札には、次のように記されています。

京の名水として平安時代より知られ源氏の邸いわゆる六条堀川館の中にとりいれられた。

室町時代には南都の僧村田珠光がこの畔に住み茶道を興



佐女牛井跡の碑

し足利義政も来遊したという。江戸初期元和二年五月織田有楽斎はこれを改修した。内径二尺四寸の円井戸であった。その後天明の大火で埋もれたが、寛政二年、藪内家六世竹陰によつて修復され、その碑が七世竹猗によつて建てられていたが円井戸碑とともに第二次世界大戦最末期の民家の強制疎開とともに撤去された。昭和四十四年醒泉小学校創立百周年記念事業の一つとしてここに碑をたて名水を偲ぶよすがとした。

それにしても、撤去された井筒はどこに消えたのでしょうか。

『都名所図会』巻之二には、図入りで、佐女牛井を紹介しています。その図を切り取って引用します。目を凝らすと、その振りがなほ、「さめうしのゐ」となっていて、説明には、「醒井五条の

南にあり、井筒に銘あり、佐女牛井、元和二年有楽再建之」と書いてあります。執筆者が勘違いしたかともおもいましたが、この説明からあきらかに意識的に「さめうしのゐ」と読んでいることがわかります。



『都名所図会』巻之二の佐女牛井の図。

(国際日本文化センター「平安京都名所図会データベース」より引用)

六条通(平安京の六条大路)の一つ南の通り、現在の花屋町通を、平安京では佐女牛小路と呼んでいましたので、その近くにあることにちなんで命名するのはごく自然なことです。このことを踏まえて、『都名所図会』では「さめうしのゐ」と称したのでしょう。では、佐女牛とはなんぞや。牛の毛色をいうらしく、幸いに

も、『南総里見八犬伝』第七輯巻之七第七十三回到、「その毛色も一ならねば、黄牛蒼牛」云々とてできます。黄牛のほうは、座右の古語辞典に載っていて、『枕草子』の用例が引用されています。蒼牛のほうも載っていないのですが、『南総里見八犬伝』に沿った解釈で、多分大過ないでしょう。

それでもなお、佐女牛井を「さめがい」と読むようになったのはどうしてかという疑問が残っています。音韻学からは、荒唐無稽かもしれませんが、「さめがい」と読みたかったから、そのように読むように変えたと考えるのはどうでしょうか。八坂神社の祭神を、牛頭天王というように、「牛」を「こ」と読むことがあるので、「さめこい」↓「さめぐい」↓「さめぐわい」↓「さめがい」というように強引に変化させたと。これは、あくまでも素人のたわごとです。

有楽好みの円井戸

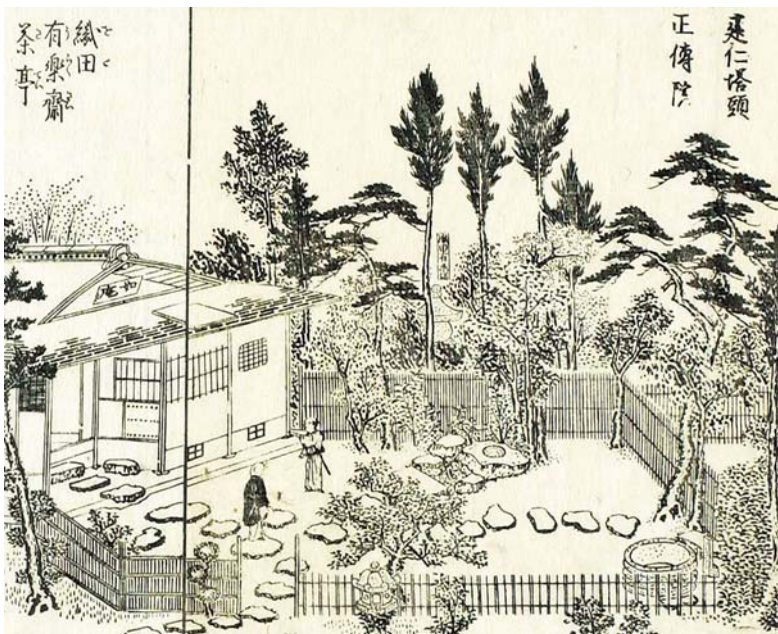
引用した『都名所図会』の図では、佐女牛井が確かに円井戸であることは、わかります。しかし、有楽斎銘の井筒が判然としなのが残念です。目を凝らすと、円井戸の左上のところに井筒らしき円弧が描いてありますが、これでは実際にどうなっていたかはわかりません。有楽斎の銘が一六一六年（元和二年）、『都名所図会』刊行が一七八六年（天明六年）、天明の大火による埋没が一七八八年（天明八年）、藪内竹陰による修復が一七九〇年（寛政二年）ですから、『都名所図会』刊行のときには、この図の程

度に荒廃していたことを示しているのかも知れません。

佐女牛井の井筒がどんな形をしていたか？ ついでですから詮索してみましよう。一六一六年（元和二年）の銘をのこした織田有楽（一五四七～一六二二）は、織田信長の弟、戦国末期を生き抜いて、最後は茶人として大成した人。東京の「有楽町」は、有楽斎にちなむ地名。晩年、有楽斎は建仁寺の塔頭正伝院に隠居し、現在国宝になっている茶室、如庵を建てました。

寛政十一年（一七九九年）に刊行された『都林泉名勝図会』には、建仁寺塔頭正伝院の図が載っていますので、一部切り取って引用しましょう。当時の如庵がどのようであったかがわかりません。左手の数奇屋造りの茶室に「如庵」の額がかかっているのが見えます。この図の右下隅にあるのが、有楽好みの井筒「佐女牛井」。たしかに、円井戸です。

有楽斎の死後、如庵のあった正伝院は、建仁寺塔頭として存続しましたが、明治時代に廃寺となり、永源院と合併して、正伝永源院（東山区大和大路四条下ル小松町、建仁寺の北）となり現在に至っています。その際、正伝院書院と如庵の建物は、民間有志の手を経て三井家の所有となり、東京、神奈川県大磯と文字通り転々と移され、現在は、愛知県犬山市の有楽苑に移築されています。この敷地内の露地に、有楽好みの井筒「佐女牛井」が現存します。「元和元年九月二日有楽」の銘があるといえますので、もとの佐女牛井の井筒とほとんど同時期の作。製作時期からみて、この井筒ともとの佐女牛井とは、対作で作ったと考えられます。したがって、もとの佐女牛井は、『都林泉名勝図会』如庵の露地（右下隅）に描かれた有楽好みの井筒と同形であったとみて差し支え



『都林泉名勝図会』巻之一、建仁寺塔頭正傳院の図の一部。如庵の露地（右下）に有楽好みの井筒「佐女牛井」が見える。
 （国際日本文化センター「平安京都名所図会データベース」より引用）

ないでしょう。

正伝院にあった織田有楽の墓は、現在正伝永源院に移されています。平成八年に如庵を復元した建物があるそうですが、通常は非公開なので訪れる機会がなく、円井戸が復元されているかどうかはわかりません。



あぶらのちどおりさがるにじわかまつちよう
 油小路通 六条 下ル 西若松町 ①



橘屋の「史菓・佐女牛井」。

六条通を東に歩くと、六条油小路の十字路にですが、油小路を下がったところの電柱に、町名看板「油小路通六条下ル西若松町」①が見つかります。

この十字路から北へゆくと、東側に和菓子屋「橘屋」(油小路六条上ルト味金仏町)があります。先ほど紹介した町名看板の「ト味金佛町」と同じ町内です。名物は、「史菓・佐女牛井」。店主いわく、「三笠でなく、どら焼きでなく、当店では、佐女牛井^{さめが}」。大粒の栗が一粒、粒餡も極上。なりよりも、包装に田井戸の井筒が描かれているのがうれしい。



プロフィール

藤田眞作(ふじたしんさく)。一九四四年(昭和十九年)北九州市生まれ。学生・大学助手として、十年間、京都で生活。工学博士を取得後、二十五年間、富士写真フイルム(株)足柄研究所にて、記録材料用の有機化合物の開発に従事。次の十年間は、京都工芸繊維大学教授として、有機合成化学・情報材料化学・化学情報学・数理化学の研究教育に従事。そのかたわら和菓子をもとめて京都市内を徘徊し、仁丹の町名看板に興味をもつ。二〇〇七年より、湘南情報数理化学研究所(<http://xyntex.com>)を主宰。

「仁丹の町名看板をよすがに京めぐり」(第2回) 2007/11/1

改 2007/12/20' 改 2008/12/24

© 2007 藤田眞作 <http://xyntex.com>